

(3) 危機に際しての導き

一九〇〇年のある日、エレン・ホワイトは彼女の家族や働き人にアメリカに帰るよう[✓]に神から示されたと伝えました。それを聞いた人々、特に、オーストラリアの人々は大変驚きました。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、アメリカのSDAはいくつもの大きな問題をかかえて危機的な状況にありました。神は、エレン・

ホワイトがアメリカに帰り、そのような状況にある人々に適切な勧告と指導をすることを望まれたのでした。

（靈性低下と世俗化）

当時、教会が直面していた大きな問題の一つは、指導者たちの靈性低下と世俗化の問題でした。エレン・ホワイトは、一八九〇年一月三日とその後の幻の中で、バトルクリークの人々が大事なことに²⁵ついて神にではなく人の知恵に頼っている、神に関する大事な事柄が経験不十分の人々の手にある、指導者たちは自分たちの意見に賛同する人たちだけを集めている、など極めて大事な事柄が示されました。²⁶これらの幻の内容は、『ライフスケッチス』第四章「神の働きにおいて世的方針を採用することの危険」に収められています。この表題は当時の状況を如実に示しています。一八九二年、彼女は、「自己中心、むさぼり、誇り、争い、心のかたくなさ、肉欲、悪しき習慣」が教会の中に見られる、と書き、また清められていない牧師たちが完全な改革を経験しない限り、牧師の働きを去るべきである、とまで訴えました。²⁷

指導者たちの靈性低下と世俗化を如述に表していたのが、レビュー出版社の経営陣でした。同社の年間売上額は、一八七三年に一万五千ドルでしたが、一八九〇年には五〇万ドルにも及んでいました。売上額は増えていましたが、それは多分に営利第一主義に基づくものでした。一八九〇年代、同社は何よりも売れる本を優先し、小説、西部物語、カトリックの本、酒類の宣伝文書まで出版していました。経営陣は、それらについて警告されると、我々は印刷屋であり、検閲官ではないと平然と答えていました。また、社長は高給を要求し、週給三〇ドルの給料を受けていました。当時按手札を受けた牧師は週給一二ドルでしたからかなりの高給でした

が、それでも満足せず、一八九三年同社を辞めていきました。

一番の問題は、これらの状況について繰り返しエレン・ホワイトから警告されていたにもかかわらず、それを無視したこと、また世界総会の指導者たちが世俗的な価値観を持っていた人々に対して断固とした態度をとらなかったことです。特に、世界総会総理のO・A・オルセンは、のちに「皆を喜ばせようとしていた」と言われたほど勇気と決断力に欠けていました。彼は、エレン・ホワイトや一部の人々の勧告にもかかわらず、世俗化の波を正すことができませんでした。一八九五年、エレン・ホワイトは、信者が高い立場にある人々に対して信頼を失いつつある、と厳しい警告を発しなければなりませんでした。²⁸ 幸い、同社は一九〇三年ワシントンD・C・に移転したことを大きな契機として正常な姿に戻っていきました。これらの一連の出来事は、エレン・ホワイトの勧告に勇気を持つて従う指導者たちの存在の重要性を教えてください。²⁹

(中央集権化)

エレン・ホワイトが、一八九〇年代に正したいと願ったもう一つの問題は、世界総会を中心とした中央集権化と統合化の問題です。世界総会の総理と少数の人々は、教会のあらゆる面で支配権を行使し、小さなことまで彼らの承認を求めています。また、レビュー出版社、バトルクリーク衛生病院、バトルクリーク大学の指導者たちは、同種の機関を一つの理事会のもとにまとめて統合体にしようと考えていました。彼らは、統合体にするにより働きの一致を保つことができる、経済的である、効率的になる、と主張していました。³⁰

エレン・ホワイトは、一八九〇年代を通して教会のそのような状況の過ちを指摘し、改革を訴え続けました。

彼女は、「少数の人々に権力を集中したり、一つの機関を他の機関のもとに置くことは神の計画ではない」と書きしました。³¹ また、万一そうすると、「サタンは断固たる決心」をして少数の人々の「判断を誤らせ、誤った原則をほのめかし、誤った方針」を持ち込む、と警告しました。³² また、中央集権のもとでは、人々は権威のある者に導きと支持を求め、最も大事な神に依存するという経験を失ってしまう、と警告しました。³³ 教会は明らかに改革が必要でしたが、指導者たちは改革の一步を踏み出せませんでした。

エレン・ホワイトは、一九〇〇年八月に帰国し、一九〇一年四月にバトルクリークで開かれた世界総会に出席しました。当時の教会員数は七万五千人で、世界総会の代議員は二二六名でした。彼女は既に七三歳になっていましたが、出席することにしました。代議員の多くは、一八九〇年代に明白になった諸問題の多くがいまだに解決されていないことを知っていました。彼らは、何かがなされなければならないという漠然とした思い、期待と不安の入り混じった思いで出席していました。

エレン・ホワイトは、総会が始まる前日、四月一日、バトルクリーク大学図書館で開かれた指導者たちの集まりに出席しました。そのとき、彼女は中央集権体制の過ちを明白に述べ、少数の者が十分な知恵と力を持つべきという考えは誤りであり、全く異なった体制が必要であること、再組織が必要であることを訴えました。

翌日の二日、世界総会が開かれ、開会宣言のあとエレン・ホワイトは約一時間にわたって代議員たちに厳粛なメッセージを語りました。彼女は構造と経営において速やかで大きな変化、再組織が必要であると力説しま

した。また献身していない働き人が重要な位置にある、神はあなたがたが真の回心することを望んでおられるという厳しい譴責の言葉を率直に語りました。代議員たちは厳粛な思いで預言者の声に耳を傾けたのはいうまでもありません。A・G・ダニエルズは、前日のエレン・ホワイトのメッセージの大筋を説明したあと、再組織検討のための委員会を組織するよう提案しました。彼の提案は受け入れられ、予定されていた議案を後にして再組織を優先して研究・討議することになりました。総会はその結果、世界総会の理事を各分野からなる二五名に増員すること、世界総会とカンファレンスの間にユニオン・カンファレンス³⁴を設立することなどの改革案を採択し、中央集権制度の弊害を是正しました。新しく世界総会の最高責任者に選ばれたダニエルズは、エレン・ホワイトの信任が厚い若千四二歳の働き人でしたが、献身した行政家として二〇世紀初頭の教会のために奉仕をしました。³⁵

（負債と経済的危機）

一八九〇年代から一九〇〇年代初頭にかけてエレン・ホワイトが貢献したもう一つの問題は経済問題でした。一八九〇年代半ば、教会は不況の影響もあり信徒からの献金の減額が目立ち、支出が増大していました。二〇世紀初頭には外国伝道のために毎年二〇万ドルもの支出が必要になっていました。このような状況のもとで世界総会やカンファレンスは多額の負債を抱えて危機的な状況でした。一八九八年世界総会は三六万六千ドルもの負債を抱えていました。一九〇一年働き人への未払い給料額は二万ドル、一九〇二年SDAのすべての機関の負債額は二〇〇万ドルにもなっていました。

世界総会が負債を抱えていた理由には、献金の減少、支出の増大に加えてバトルクリーク衛生病院などの建築費などに多額の援助をしたこと、不適切な支出——たとえば、不必要と思われた指導者の海外旅行——などがあります。また、借金をしての不安定な経営方針の問題が明らかになりました。一八九〇年代半ばに、世界総会に多額の金額を貸していた一信徒が、七万三千ドルを返金するよう求め、世界総会は返金できなくて大問題になりました。

エレン・ホワイトは、このような状況のもとでさまざまな勧告を与えました。たとえば、彼女のアドバイスに応じて、世界総会の総理は、一八九九年働き人の給料を二五%カットする提案をし、彼自身はそれ以上の減額を申し出ました。また、彼女は、一九〇〇年に出版された『キリストの実物教訓』の印税を教会に捧げることにしました。同書は、信徒に歓迎され、彼女は三年間で二六万三千ドルもの大金を教育関連の機関に捧げることができました。当時教育関連の機関は三五万ドルほどの負債をかかえていましたから、エレン・ホワイトの援助は困難を乗り越えるために大いなる助けとなりました。³⁶一九〇一年以降世界総会は、借金をしない健全財政の方針に改め、徐々に経済的危機を乗り越えていきました。

（出バトルクリークを経ての改革）

一九〇一年の世界総会後の教会指導者たちの課題は、同世界総会で成し遂げられた制度改革の効率的な実施、残された課題の解決、また改革の精神をいかに推し進めていくか、ということでした。残された課題の一つは、出バトルクリーク（諸機関をバトルクリークから他の地域に移すこと）という課題でした。一八九〇年代のバ

トルクリークには、世界総会本部、レビュー出版社、バトルクリーク大学、バトルクリーク衛生病院があり、SDAの本拠地としての様相を呈していました。特に衛生病院は、院長のJ・H・ケログの指導の下に巨大化し、同年代には九〇〇人も働き人を擁し、有名な病院になっていました。

しかしエレン・ホワイトを悩ませたのは、バトルクリークのSDAの間に見られる霊性の低下と諸機関が原則から離れた経営をしていたことでした。これらの事柄は、既に一八六〇年代後半から徐々に見られるようになり、一八七二年彼女は、バトルクリーク教会の霊性の低下を嘆き、両親が子供たちをバトルクリークに送ることを勧めない、と書きました。³⁷ 一八八二年、彼女は『教会へのあかし』の中でバトルクリークについて警告の記事を多く書きました。その中には、同地の教会には敬虔や献身の精神が希薄である、世的で自己中心の精神が見られる、³⁸ 大学が設立された目的を達成していないで、世俗的大学になっている、³⁹ 献身していない教師により神の働きが妨げられている、⁴⁰ などという厳しい指摘があります。

また、一八九〇年代、エレン・ホワイトは繰り返し、指導者たちやレビュー出版社の経営者たちに勧告と警告文を送り、同社が本来の姿に立ち返るようにと訴えました。たとえば、一八九八年一月、彼女はレビュー出版社の編集長のユライア・スミスに出版社は見捨てられた「聖堂」になっている、汚れた商品を扱い、不正を行っている、と厳しい譴責の言葉を書き送りました。⁴¹ しかし、同社の状況は一九〇〇年代初頭になっても変わりませんでした。長年そこで働いていたある人物は、後年、当時の状況について語り、教会の出版物を印刷していた働き人がタバコを吸っていたこと、彼がバプテスマを受けたいと決心したら仲間から馬鹿にされた、

と証言しました。この働き人の経験は、当時の働き人の霊性低下を物語る一例です。

一方、一八六六年に開院したバトルクリーク衛生病院は繰り返し増築、農場、食品製造などの多角経営を進め、一八九〇年代には九〇〇人程の働き人を擁する巨大企業の様相を呈していました。エレン・ホワイトは、巨大化する病院に対して繰り返し、巨大化するより各地に分散した医事伝道を進めるべきである、と警告しました。また、彼女は、病院がS D Aの価値観を有する独自の病院であるべきである、と勧告しました。しかし、ケログ医師の強力な指導下にあった同病院は、世俗的価値観と妥協し、世界総会から分離した事業にするよう模索していました。一八七四年に開校したバトルクリーク大学も、エレン・ホワイトの勧告に従わず、古典研究を中心にする伝統的な大学として発展していきました。

更に、深刻な問題は、多くの信徒がバトルクリークに集まるようになったことです。彼らは、S D Aの本拠地にいることが安住の地にいるように思えたからです。彼らにとって、同地にいることの便宜性が何よりも魅力的なことでした。

エレン・ホワイトは、人々がバトルクリークに集中するのではなく、働きが各地で分散されるべきこと、信徒たちは各地で証しをすべきことを繰り返し勧告しました。一八九〇年代になると、彼女はレビュー出版社、大学、病院が世俗化したバトルクリークから他の場所に移転し、S D Aの理念に沿った働きを勧めることを強調するようになりました。しかし、その勧告に従った唯一の機関は、バトルクリーク大学でした。同大学は、一八九七年、エレン・ホワイトの勧告に従いたいと願っていたE・A・サザランドが学長になり、彼の指導の

もとに一九〇一年ミシガン州ベリアンスプリングスに移転し、実業教育を重視するオーストラリアのアボンデールにおける教育方針に倣った教育を目指すことになりました。

他の機関の出バトルクリークは、多くの人が予想していなかった出来事を契機として実現しました。それは、一九〇二年二月一八日、バトルクリーク衛生病院が大火にあつたこと、ついで同年二月三〇日にレビュー出版社も大火にあつたことです。当時、二つの大火に対する人々の反応はさまざまで、ある人々は神が警告と刑罰を与えられ、悔い改めを促していると感じていました。同社は、大火後すぐに長年続けていた小説などの印刷を止め、従来の方針の過ちを認めました。しかし、衛生病院の事務長は神が刑罰を与えられるようなことはない、と主張していました。

大火に対するエレン・ホワイトの立場は明確でした。彼女は、レビュー出版社の大火後、次男のジェームス・エドソン・ホワイトに手紙を書き、神の民が警告に耳を傾けず、悔い改めなかったので、神がこの様な災難が下るのを許された、それは癒しのためである、と書き送りました。⁴² しかも、彼女は同社の大火の数か月前に社長にあてた手紙の中で、私はレビュー誌を開くのが恐ろしいです……なぜなら神がレビュー出版社を焼いて清めるのではないか、と思うからです、と書き送りました。ですから、彼女は、同社の大火を知っても、さほど驚かなかったのです。⁴³ 彼女は、何より世界総会などの諸機関がバトルクリークでなく、他の所で新しい雰囲気、環境のもとに働きを進めていくべきであると信じ、出バトルクリークを説いていたのです。

世界総会の指導者たちは、以前から出バトルクリークについて討議していましたが、二つの大火により移転

という方針が急速に進みました。その結果、一九〇三年、世界総会とレビュー出版社がワシントンD・C・に
移転し、新しい一步を踏み出しました。⁴⁴